

京都3大学合同鑑賞サポーター養成プロジェクト

参加者：京都造形芸術大学 8名・京都大学 4名・京都府立大学 6名 計 18名

担当及び講師：伊達隆洋（京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター）

期間：2009年6月14日～9月13日

授業回数：20回

鑑賞会実践：京都大学総合博物館 特別展「広がる地図文化 - 京都大学地図コレクション -」において、一般の来館者（各回 20～30名）を対象に展示品鑑賞会を9月6日・13日の各日2回ずつ行った。

協力：大野照文（京都大学教授・京都大学総合博物館館長）、上杉和央（京都府立大学講師）

概要：

近年、多くの博物館や美術館では、コミュニケーションを通じて来館者と展示品との橋渡しを行うサイエンス・コミュニケーターやギャラリートーカー（以下、まとめて「鑑賞サポーター」）が置かれるようになってきている。コミュニケーションを通じた鑑賞では、鑑賞者の理解や鑑賞体験の充実は、伝えられる情報の内容だけではなく、そこで交わされるコミュニケーションの質が大きなカギになっている。しかし、現状では、こうした鑑賞サポーターの多くは、知識や情報は持っていて、それを来館者との鑑賞に生かせるようなコミュニケーションについて学ぶ機会をほとんど持っていない。

本プロジェクトは、すでに科学、歴史学、美術の基礎知識を学んでいる京都大学、京都府立大学、京都造形芸術大学の3大学の学生を対象に、これまでアートの領域で行われてきたACOPの手法を用いてのトレーニングと、展覧会での鑑賞サポートの実践を通じて、専門性とコミュニケーションスキルを備えた鑑賞サポーターの養成を試みた。

今回のプロジェクトでは、京都大学総合博物館特別展「広がる地図文化 - 京都大学地図コレクション -」での鑑賞サポートを最終目標としてトレーニングを行った。展示品である古地図の鑑賞は、ACOP経験者である本学学生には、アート領域以外で自分たちの経験を活かす初めての実践であり、一方で、京都大学・京都府立大学のメンバーにとって、いわゆる科学的・歴史学的資料にアート作品鑑賞の手法を用いてアプローチするという、きわめて学際的な試みとなった。

実施内容：

前半2ヶ月は、導入にコミュニケーション・トレーニングとして数本のワークショップを行い、その後、アート作品をトレーニング用の素材とした対話型鑑賞の訓練を行った。なお、本学学生にはACOP経験者としてメンターの役割をとらせた。

当初、ACOP未経験のメンバーには、「資料」へのアプローチは科学的・客観的に行われ

るべきだという考えが多かったようである。逆を言えば、自分たちがみて考えることはあっても、それは主観的な感想であって、科学的分析や資料にまつわる歴史研究等のように正しい理解の方法ではないと考えていたということである。しかし、そうしたメンバーも、ワークショップやアート作品の鑑賞によるトレーニングを経ることで、

- 1.) モノ（展示品）にまつわる情報ではなく、モノそれ自体から考えること
- 2.) 「主観」「客観」という枠組みが相対化され、それに伴い「正しい理解」という認識も相対化し、「理解の多様性」を認識するようになること
- 3.) 上記のような変化を生じさせる、他者とのコミュニケーションに対する重要性の認識

といった変化が見られた。

以上の点を踏まえ、後半の課程では実際の展覧会に向け、展示される古地図を用いての対話型鑑賞の訓練を行った。京都府立大のメンバーが歴史的知見での中心となりながら、歴史資料の古地図にここまでトレーニングを行ってきた手法でのアプローチを試みることで、モノそのものからの考察と「まつわる情報」との統合的な鑑賞のサポートを目指した。

後半のトレーニングでは、第一に、専門的知見といわれるような知見も、最初に生成されたプロセスにおいてはモノそのものから出発しており、そのプロセスは学問領域を超えて共通しているという点を認識した。そして、本プロジェクトでの鑑賞サポートが目指すのは、来館者と展示品の間こうした生成過程を生み出すものであるとの認識を深めた。

本プロジェクトは、あくまで鑑賞サポーターの養成課程がその骨子であり、展覧会での実践はその成果発表と位置づけていた。とはいえ、鑑賞後の来館者からのアンケートでは、「新鮮な企画だった。」「他の人と話しながら見ることで、こんなに深く見られるものなのだなと思った。」「今後もやって欲しい。」といった声が多く、展覧会関係者からも好評を頂き、成果として十分な手応えを得た。参加メンバーには各自反省点もあるが、レポートには今回の経験を各自の分野でどのように活かすか、今後に向けた言葉が数多く見られた（メンバー自身の言葉は添付の「レポート抜粋」を参照）。

今後に向けて：

今回のプロジェクトは、これまで本学で行われてきた ACOP の有用性が、学問分野の枠を超えて広く活用可能であることを確認する機会となった。本学学生にとって、アート領域での学びを他分野、ひいては社会に対して活かしていく方法の一つを具体的に経験することができる機会であり、また他分野・他大学の学生からの刺激を受け、より広い視点を獲得することができる機会であった。一方、京都大学・京都府立大学のメンバーとっては、自らの学術的専門性を相対化する機会であり、そうした専門性を社会に向けてアウトプットする手段を得る機会となった。

現在、専門性の社会へのアウトプットは多くの分野で課題となっており、他の分野に対しても ACOP の手法を応用し、寄与できる点は少なくない。今後もこのような試みは積極的

に行われるべきだと思われる。そのためにも、鑑賞のサポートに必要な要素の分析と、各要素における達成目標に沿ったメニューの体系化をより進めていかなければならない。また、こうした試みを今後も行っていくにあたって、他大学との連携に関する制度面での調整など課題も見えてきた。これらの検討も合わせて進めていく必要があるだろう。

参加学生レポート抜粋：

- ・「今、私が目指しているのは、古地図の鑑賞サポートである。それなのに、古地図や絵巻物などの『絵画資料』は客観的・科学的に分析するもの、としか考えていなかったのだ。ACOP のグループ鑑賞は、おもしろそうだけれど、普段目標としているのとは正反対の見方だと思っていた。しかし、アンケートの分析を読んでいくうちに、そんなに単純なことではない、と気づいた。ACOP の経験者は、作品から受容したイメージを解体し、本質に迫ろうとするようになったという。自分の主観的な感じ方を相対的なものと認識し、検討できるようにできるようになったという。視野が広がったという。これは、まさに、私が身につけたかったものでは…。そこで、改めて、自分の古地図との向き合い方を振り返ってみた。そして、古地図を『資料』ととらえている時点で、私は見方を固定化していたのだと反省した。もっと、広い視点を持たなければならない」
- ・「私の場合、美術館にはそれほど頻りに足を運ぶ事はありませんでしたが、博物館にはよく行っていました。その時に一番に目が向かうのは“物そのもの”ではなく、むしろキャプションのほうでした。曖昧な知識しかもっていない自分を知っていて、物を理解するためには“まず初めに知識ありき”だと思っていたからです。しかし報告書の中でも何人かの方が書いておられましたが“物そのもの”を理解するためにまず必要なのは、自分がどう感じ、どう見たのかということなのかもしれません。作品の受け止め方は人それぞれ千差万別で作者の意図だけが全てではないと、新たな視点が開けた気がしました。そして他の人と、それぞれ自分がその作品をどう見たのかということをお互いに伝え合うことが出来れば、自分の気が付かなかった事や考え方に気が付くことができます。」
- ・「練習を通してもっと具体的にナビゲーターの役割の意味が理解できました。知識を与えるということではなく、意識を深めさせることを促進させる役割。この役割を果たすために一緒に『みて』、相手の話をしっかりと『きき』、お互いに『はなす』のだと。この目的意識をしっかりと持ち、ナビゲーターとしての役割を果たしていけるように練習に励んでいきたいと思います。」
- ・「今回の作品はどれも空想の世界の地図などではなく、形はさまざまではありますが現実の世界を描いた地図です。お客様に単に『あー、こんな地図もあったんだ。』とだけ思われてしまってはいけません。(最終的な感想はこうであってもよいかも知れませんが)この地図は何を伝えようとしているのか、どうしてこのように描いたのか、いったいどのような役割を果たしていたのか...等々までも、キャプションを読んでわかっているだけではなく、実際に自分の頭で考えてもらうことで、作品だけではなく『地図』『歴史』『アート』についても考えてもらえるようにしていきたいと思います。」

・「『見る』という行為は作品の表層を視線でなぞるだけの、表面的で薄っぺらな行為ではありません。考古学でも土器に関して言えば、撫でや刷毛の向きひとつひとつに目を向けて、ほんの一部分の色の变化、厚みの变化、胎土の変化も見逃さないということが大切だとよく言われます。そしてそれが『見る』ということなのだ。『見る』ということは出来ればそれこそ五感全てを駆使して行われるべき行為なのかもしれません。美術に関してそれは同じ事なのだと思います」

・「私の発信した意味内容と比べて、帰ってきたボール（返答）が過不足なく『イコール』であるかどうか（正解しているかどうか）ということを確認めるのではなく、私の投げたボールが相手の頭の中という Black box を通って変形してきた『新しい、別のモノ』に対して『OK』、『それでもよい』かどうか判断する作業が行われていたと思います。それはしかし、単なる『間違い』ではなくて、コミュニケーションが広がって、自分でも予期しなかったものに繋がるという、積極的な意味での『ズレ』だと思いました。『正解』することと、『それでも良い』ということは違います。そして会話を膨らませる可能性は後者の方にあるのでしょうか。誰もが好き勝手に思い思いのことを口走るのをよし、というわけではありません。相手と誠実に向き合うことを行った上で、『相手の事がわからないということが、わかる』、『ズレてしまう』という事実をネガティブに捉えるのではなく、コミュニケーションの豊かさとして捉えるべきだ、ということです。」

・「私は、このプロジェクトでの体験を塾講師のアルバイトに活かそうと考え、現在試行錯誤しています。塾での指導は効率や実績を重視するので、どうしても講師が一方的に知識や情報を発信し、生徒がそれを受け取るという指導になりがちです。それは仕方のないことだとも思いますが、そのような指導方法に対してどこか疑問を感じていました。それは、そのように得た知識は生徒の中にあまり定着しない、テストや受験のために詰め込んでそれらが終われば忘れてしまうということに気付いたからです。この傾向は私がよく指導する社会系の科目にとっても顕著でした。それに気付いてから、本当に生徒の能力を向上させるにはどのような指導方法がよいのかずっと考えていましたが、具体的にどうすべきなのかわからずにいました。

しかし、このプロジェクトの経験からその答えの糸口が見つかりました。ACOP の作品鑑賞の方法『みる・考える・話す・聞く』が勉強にも活かすことができるのではないかと考え、実践してみたところ、この方法を経てわかったことや理解したことは忘れにくいということがわかったのです。具体的に言えば、資料等について『この資料は～があらわされたもので、～から～ということがわかるね。』とこちらから言うのではなく、『これは何が表されているだろう？ これをみて気付いたことや考えたことを教えて』と生徒に問いかけをし、意見が出たら『じゃあどうしてそうなんだろう？』とさらに考えてもらうということです。このように講師から一方的に教わるのではなく、自

分であるいは一緒に考えて導き出したものは、子供たちのなかに残るようです。それは、外部から入ってきたのではなく、自分自身のなかから導き出したものだからだと思います。」